

AsciidoctorとGradleでつくる文書執筆環境

<https://github.com/h1romas4/asciidoctor-gradle-template>

2023-06-28

はじめに

本文書は AsciiDoc とその Ruby による実装である AsciiDoctor を用いて AsciiDoc 文書を執筆する環境を構築する手順を示します。実行環境は Windows、Linux、macOS の各 OS に対応しています。

この文書の手順より以下のことができるようになります。

AsciiDoc 形式で執筆した文書を HTML/PDF 形式に変換

AsciiDoc 文書変換用 Gradle スクリプト

テキストエディターで変換結果をリアルタイムにプレビューしながら文書を編集

Visual Studio Code と AsciiDoc 拡張設定

AsciiDoc は表現力の高い文書をテキストファイルベースで執筆できるテキストプロセッサです。他の軽量テキストプロセッサが持たない文書間のインクルードやソースコードの挿入などの機能も有し、かつ簡潔です。特に技術文書の執筆には大きな力を発揮することでしょう。



AsciiDoc の表現力を示すひとつの例は、このような脚注表現です。

一般的にこのようなテキストプロセッサを用いた執筆環境を構築するためには多くの準備が必要となりますが、本文書の手順は極力初期導入するプロダクトを少なく、簡単に快適な執筆環境を整えられるよう考えられました。

具体的には文書の変換に、実行を JVM 環境だけに依存する AsciiDoctorJ と Gradle を活用し、執筆環境については Visual Studio Code を用いることでリアルタイムに文書をプレビューしながら、最後にコマンド一つで HTML/PDF 化できるように準備してあります。PDF 出力に関しては、フォントセットや禁則処理設定をプロジェクトにもたせることにより、実行環境に関わらず同一出力が得られるようになっています。

AsciiDoc による文書の執筆は形式的で効率が良く、また更新差分が取りやすいため文書履歴管理や共同執筆環境としても有効です。このメリットをさらに活用するため、本手順では日本語に対応したテキストダイアグラム記法による図形や数式のベクター画像挿入もサポートしました。

本文書がみなさんの執筆活動のお手伝いになれば幸いです。

謝辞

本文書の手順の実装であるビルドスクリプトやテーマでは次のプロダクトと技術資料が使われています。



プロダクト名の隣にライセンスを併記しました。商用利用等で制限のあるプロダクトはありませんが、それぞれライセンスを確認してください。

Font

- 源真ゴシック - SIL Open Font License 1.1 - <http://jikasei.me/font/genshin/>
- 源様明朝 - SIL Open Font License 1.1 - <https://github.com/ButTaiwan/genyo-font>
- Ricty Diminished - SIL Open Font License 1.1 - <https://github.com/edihbrandon/RictyDiminished>
- Morisawa BIZ UDGothic - SIL Open Font License 1.1 - <https://github.com/googlefonts/morisawa-biz-ud-gothic>
- Morisawa BIZ UDMincho - SIL Open Font License 1.1 - <https://github.com/googlefonts/morisawa-biz-ud-mincho>
- Open Iconic - MIT License - <https://github.com/iconic/open-iconic/>

AsciiDoc

- AsciiDoctor - MIT License - <https://asciidoctor.org/>
- AsciiDoctor.j - Apache License 2.0 - <https://github.com/asciidoctor/asciidoctorj>
- AsciiDoctor.js - MIT License - <https://asciidoctor.org/docs/asciidoctor.js/>
- AsciiDoctor PDF - MIT License - <https://asciidoctor.org/docs/asciidoctor-pdf/>
- AsciiDoctor Gradle Plugin Suite - Apache License 2.0 - <https://github.com/asciidoctor/asciidoctor-gradle-plugin>
- asciidoctor-pdf-linewrap-ja - MIT License - <https://github.com/fuka/asciidoctor-pdf-linewrap-ja>
- asciidoctor-nabetani - MIT License - <https://github.com/nabetani/asciidoctor-nabetani>

Build Tool

- SDKMAN - Apache License 2.0 - <https://sdkman.io/>
- Gradle - Apache License 2.0 - <https://gradle.org/>

Text Editor

- Visual Studio Code - Microsoft - <https://code.visualstudio.com/>
- asciidoctor-vscode - MIT License - <https://github.com/asciidoctor/asciidoctor-vscode>

Guide

- asciidoctor-pdfでかっこいいPDFを作る - <https://qiita.com/kuboaki/items/67774c5ebd41467b83e2>

素晴らしい成果を公開されているみなさまに感謝します。

目次

はじめに	1
謝辞	2
1. AsciiDoc 文書変換用スクリプトを使う準備	5
1.1. Java 実行環境の導入 (macOS / Linux の場合)	6
1.2. Java 実行環境の導入 (Windows の場合)	8
2. AsciiDoc から HTML/PDF 文書を作成する	10
2.1. サンプル文書の変換を試す	10
2.2. 変換後の文書	13
2.3. テキストエディタで AsciiDoc 文書を編集する	15
2.4. 文書のファイル構成	18
2.5. 執筆のイテレーション	19
3. AsciiDoc 記法	20
3.1. 文書中の相互参照	20
3.2. ソースコードシンタックスハイライト	21
3.3. ファイルインクルード	21
3.4. 表形式	22
3.5. 脚注	22
3.6. コラム表現	23
3.7. ダイアグラム記法	24

1. AsciiDoc 文書変換用スクリプトを使う準備

本手順で用いる AsciiDoc 文書変換用スクリプトはビルドツールである Gradle を活用しており、実行するためには Java 実行環境が必要です。



Java 実行環境は、文書変換スクリプトを動作させる過程で唯一 OS 環境に手動で導入する必要があるプロダクトです。それ以外のものは Gradle によりプロジェクトとして独立した形で自動的に導入されます。

お使いのコンピューターのコマンドライン環境（macOS/Linux ではターミナル、Windows では cmd.exe か powershell.exe）で `java -version` コマンドを入力し、Java 8 以上のバージョンが表示されるようであれば既に準備は整っています。

macOS/Linux の場合

```
$ java -version
openjdk version "1.8.0_192"
OpenJDK Runtime Environment (Zulu 8.33.0.1-macosx) (build 1.8.0_192-b01)
OpenJDK 64-Bit Server VM (Zulu 8.33.0.1-macosx) (build 25.192-b01, mixed mode)
```

Windows の場合

```
C:¥> java -version
openjdk version "1.8.0_192"
OpenJDK Runtime Environment (AdoptOpenJDK)(build 1.8.0_192-b12)
OpenJDK 64-Bit Server VM (AdoptOpenJDK)(build 25.192-b12, mixed mode)
```



本文書では Java 11 を用いて解説します。

1.1. Java 実行環境の導入 (macOS / Linux の場合)

もし macOS / Linux 環境に Java 実行環境がなければ SDKMAN を利用することで、ターミナルから簡単に導入することができます。

<https://sdkman.io/>

SDKMAN! is a tool for managing parallel versions of multiple Software Development Kits on most Unix based systems.

— SDKMAN

手順. SDKMAN を用いた Java の導入

```
$ curl -s "https://get.sdkman.io" | bash ❶
$ source "$HOME/.sdkman/bin/sdkman-init.sh" ❷
$ sdk list java ❸
=====
Available Java Versions for Linux 64bit
=====
Vendor      | Use | Version      | Dist  | Status      | Identifier
-----
Temurin     |     | 19           | tem   |             | 19-tem
             |     | 17.0.4       | tem   | local only  | 17.0.4-tem
             |     | 17.0.4.1     | tem   |             | 17.0.4.1-tem
             |     | 11.0.16.1    | tem   |             | 11.0.16.1-tem
             |     | 8.0.345      | tem   |             | 8.0.345-tem
             |     | 8.0.342      | tem   |             | 8.0.342-tem
             |     | 8.0.332      | tem   |             | 8.0.332-tem
$ sdk install java 11.0.16.1-tem ❹
```

- ❶ SDKMAN を導入します。
- ❷ SDKMAN を環境に設定します。
- ❸ 導入できる Java のバージョンを一覧します。
- ❹ Java 11 系の最新バージョンを指定して Java を導入します。

また、Gradle は JAVA_HOME 環境変数に実行環境の Java のパスが設定されていることを期待していますので、.bashrc で次のように JAVA_HOME を設定します。

手順. JAVA_HOME の設定

```
$ vi ~/.bashrc ❶  
export JAVA_HOME=~/.sdkman/candidates/java/current ❷  
$ source ~/.bashrc ❸
```

- ❶ vi エディタで .bashrc を開きます。
- ❷ 本ラインをファイルの最下部に追加し vi を保存終了します。
- ❸ 設定を適用します。

これで準備完了です。

SDKMAN について

SDKMAN は主に Java エコシステムの開発環境をコマンドラインから簡単に導入・設定するためにつくられた管理ソフトウェアです。

たとえば簡単に各種 Java のバージョンを導入し切り替えることができます。

手順. SDKMAN による Java のバージョン切り替え

```
$ sdk install java 8.0.345-tem ❶  
$ sdk default java 8.0.345-tem ❷  
$ sdk default java 11.0.16.1-tem ❸
```

- ❶ Java 8 を導入
- ❷ Java 8 をデフォルトに設定
- ❸ Java 11 をデフォルトに戻す

1.2. Java 実行環境の導入(Windows の場合)

もし Windows 環境に Java 実行環境がなければ AdoptOpenJDK プロジェクトが提供する OpenJDK のバイナリを導入すると良いでしょう。

<https://adoptopenjdk.net>

Java™ is the world's leading programming language and platform. The code for Java is open source and available at OpenJDK™. AdoptOpenJDK provides prebuilt OpenJDK binaries from a fully open source set of build scripts and infrastructure.

— AdoptOpenJDK

<https://adoptopenjdk.net> サイトにブラウザでアクセスし、OpenJDK 11 (LTS) - HotSpot を選択した後、zip ファイルをダウンロードしてください。



zip ファイルを任意の場所に展開します。ここでは C:\develop\runtime\openjdk11 に展開したとします。



Gradle は JAVA_HOME 環境変数に実行環境の Java のパスが設定されていることを期待していますので、**エクスプローラー > PC (右クリック) > プロパティ > 詳細設定 > 環境設定** からユーザー環境変数に JAVA_HOME を追加し、先ほど .zip を展開したパス (C:\develop\runtime\openjdk11) を設定します。



Gradle は JAVA_HOME 環境変数を元に Java の実行環境を探すため、java コマンドを使うための PATH 環境変数は設定しなくてもかまいません。

これで準備完了です。

2. AsciiDoc から HTML/PDF 文書を作成する

2.1. サンプル文書の変換を試す

環境の準備ができましたので AsciiDoc 文書を HTML/PDF に変換してみます。

変換に使うスクリプトは GitHub のリポジトリに公開されており、リポジトリには HTML/PDF 変換に使うファイル一式と、文書サンプルとして "この文書" の AsciiDoc ファイルが置かれています。まずはサンプル文書が正しく変換できるかを試してみましょう。

macOS / Linux の場合は次のようにします。

手順. PDF 変換ビルドスクリプトの取得と実行

```
$ curl -L -O https://github.com/h1romas4/asciidoctor-gradle-template/archive/master.zip ❶  
$ unzip master.zip ❷  
$ cd asciidoctor-gradle-template-master ❸  
$ ./gradlew docs ❹  
BUILD SUCCESSFUL in 19s ❺  
2 actionable tasks: 2 executed
```

- ❶ リポジトリのファイルをダウンロードします。
- ❷ ダウンロードした .zip ファイルを展開します。
- ❸ カレントディレクトリを展開したフォルダの中に移します。フォルダ名は任意のものに変更可能です。本手順ではプロジェクトフォルダと呼称します。
- ❹ Gradle のビルドを実行します。初回実行時はビルドに必要なファイルをダウンロードするため少し時間がかかります。次回は数秒で完了します。
- ❺ BUILD SUCCESSFUL が出力されればビルド成功です。

Windows をお使いの場合は同等の操作をブラウザとエクスプローラーを使って行います。



Windows の場合 .zip ファイルの展開先はマルチバイト文字を含まないパスにしてください。JRuby の制約により変換処理がエラーとなります。また、プロジェクト内部で使うフォルダやファイル名のマルチバイト名も同様です。

1. ブラウザを使って <https://github.com/hlromas4/asciidoctor-gradle-template/archive/master.zip> にアクセスしリポジトリのファイルを取得します。
2. ダウンロードした .zip ファイルを右クリックし展開します。フォルダ名は任意のものに変更可能です。本手順ではプロジェクトフォルダと呼称します。
3. 展開したフォルダ内をエクスプローラーで表示した上で、アドレスバーに `cmd.exe` と入力し、このフォルダをカレントディレクトリとしてコマンドプロンプトを起動します。



4. `.\gradlew.bat docs` と入力し Gradle ビルドを実行します。初回実行時はビルドに必要なファイルをダウンロードするため少し時間がかかります。次回は数秒で完了します。
5. `BUILD SUCCESSFUL` が出力されればビルド成功です。

プロキシサーバーの設定

もしお使いのコンピューターがプロキシサーバー経由のインターネットアクセスを行う場合は、次のコマンドを `./gradlew docs` をする前に入力してください。インターネットを使ったライブラリの取得が正しく行われるようになります。ホスト名 (`example.com`) と ポート番号 (`8080`) 部分はそれぞれの環境に合わせてください。

手順. プロキシサーバー設定 (Windows)

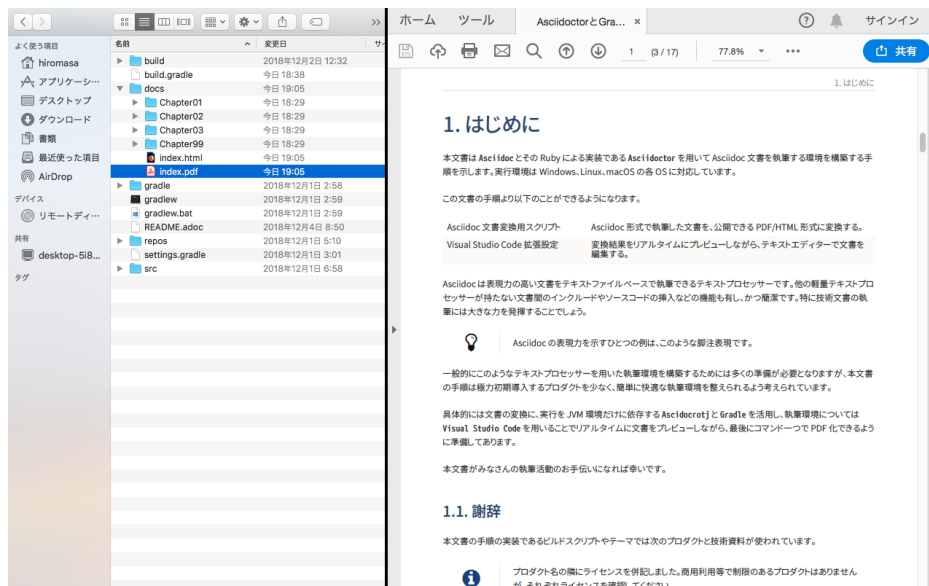
```
set JAVA_OPTS=-DproxyHost=example.com -DproxyPort=8080
```

手順. プロキシサーバー設定 (macOS / Linux)

```
export JAVA_OPTS=-DproxyHost=example.com -DproxyPort=8080
```

2.2. 変換後の文書

`./gradlew docs` のビルド操作により AsciiDoc から変換された文書は、`docs` フォルダに HTML版(index.html) と PDF版 (index.pdf) として格納されます。



PDF 文書

目次
1. はじめに
1.1. 謝辞
2. AsciiDoc 文書変換用スクリプトを使う準備
2.1. Java 実行環境の導入 (macOS / Linux の場合)
2.2. Java 実行環境の導入 (Windows の場合)
3. AsciiDoc から PDF/HTML 文書を作成する
3.1. サンプル文書の変換を試す
4. AsciiDoc テンプレート集
4.1. 脚注
4.2. 画像挿入
4.3. キーボードショートカット表記
4.4. 属性値の文書への挿入
4.5. ソースコード (直接記述)
4.6. ソースコード (外部ファイルの include)
4.7. サイドバー
4.8. 引用
4.9. 表組み
4.10. 改ページ
4.11. 水平線
4.12. リスト
4.13. リスト (順番あり)
4.14. 脚注

AsciiDoctorとGradleでつくる文書執筆環境

<https://github.com/h1romas4/asciidoctor-gradle-template> - 2018-12-01

1. はじめに

本文書は AsciiDoc とその Ruby による実装である AsciiDoctor を用いて AsciiDoc 文書を執筆する環境を構築する手順を示します。実行環境は Windows、Linux、macOS の各 OS に対応しています。

この文書の手順より以下のことができるようになります。

AsciiDoc 文書変換用スクリプト	AsciiDoc 形式で執筆した文書を、公開できる PDF/HTML 形式に変換する。
Visual Studio Code 拡張設定	変換結果をリアルタイムにプレビューしながら、テキストエディターで文書を編集する。

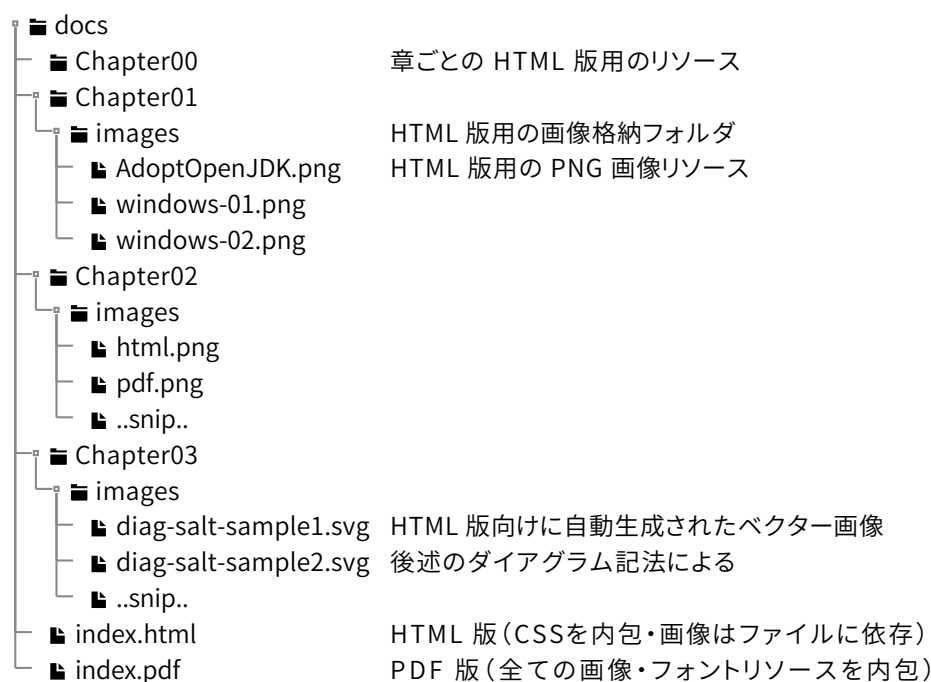
AsciiDoc は表現力の高い文書をテキストファイルベースで執筆できるテキストプロセッサです。他の軽量テキストプロセッサが持たない文書間のインクルードやソースコードの挿入などの機能も有し、かつ簡潔です。特に技術文書の執筆には大きな力を発揮することでしょう。

AsciiDoc の表現力を示すひとつの例は、このような脚注表現です。

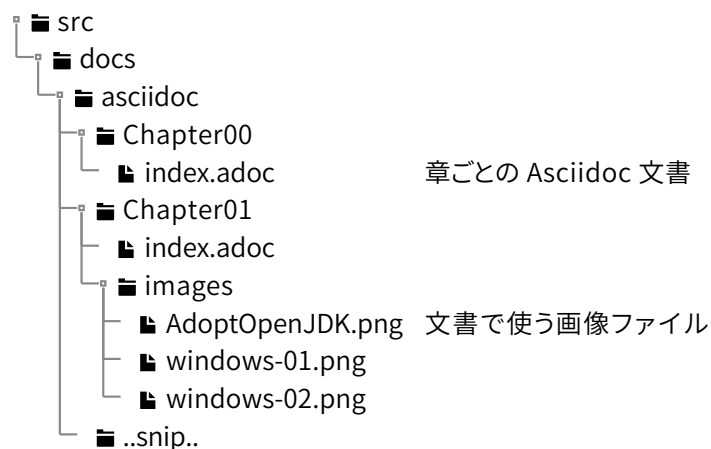
一般的にこのようなテキストプロセッサを用いた執筆環境を構築するためには多くの準備が必要となりますが、本文書の手順は極力初期導入するプロダクトを少なく、簡単に快適な執筆環境を整えられるよう考えられています。

HTML 文書

成果物の出力先となる docs フォルダの構成は次のとおりです。



成果物文書のソースとなるのは `src/docs/asciidoc` に配置された AsciiDoc 文書と画像ファイル群です。



docs 出力フォルダの構成としては、章 (Chapter*/images) フォルダには HTML 版からリンクされるリソースが `src/docs/asciidoc` からコピーされ配置されます。また、後述するダイアグラム記法を使った図表や数式も、ビルドのタイミングでベクター画像が生成され同フォルダに出力されます。

PDF 版のファイルについては `index.pdf` 単体で完結しており、フォントや画像リソースなど全てが PDF ファイル内に格納されます。

以上から成果物の配布は次のようになります。

HTML 文書	docsフォルダの <code>index.pdf</code> を除く全てのファイルを配布。
PDF 文書	docs/ <code>index.pdf</code> のみを配布。

なおいずれの場合も `index.*` のファイル名は任意の名称に変更可能です。



`docs` フォルダは成果物の出力専用フォルダとなっており、ビルド時にいったん全てのファイルが削除されますので、**自らが作成したファイルは配置しないように注意してください**。執筆で作成するファイルは必ず `src/docs/asciidoc` 配下に配置します。

2.3. テキストエディタで AsciiDoc 文書を編集する

2.3.1. VS Code によるリアルタイムプレビュー

プロジェクトフォルダに配置された AsciiDoc 文書は Visual Studio Code を利用してリアルタイムに変換結果をプレビューしながら編集できるように準備されています。

プロジェクトフォルダを Visual Studio Code で開き、拡張機能の推奨事項から拡張を導入します。

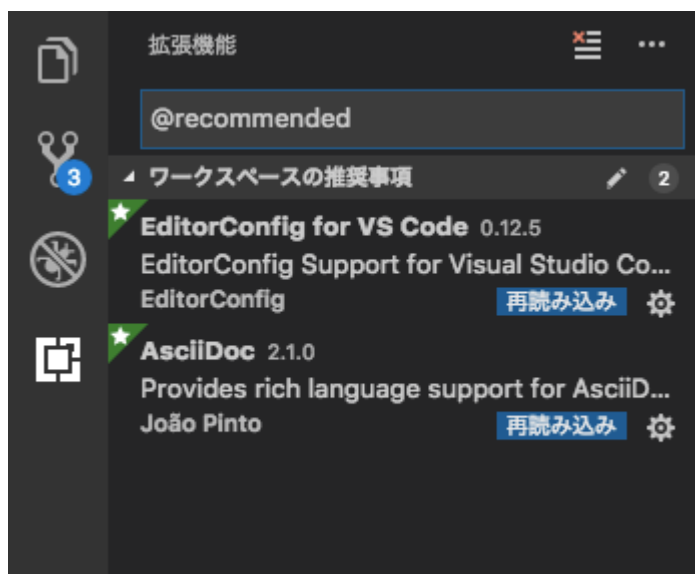


拡張機能の推奨は `.vscode/extension.json` で設定されています。文書に応じて設定し、執筆メンバーの環境を揃えることができます。

1. [すべてインストール] ボタンをクリックします。



2. [再読み込み] ボタンをクリックします。



3. AsciiDoc 文書（src/docs/asciidoc/index.adocなど）を Visual Studio Code のエクスプローラーから選択して開き、文書を開いたエディタ部右上に配置された **[Open Preview to the Side]** アイコンをクリックすると、画面右側に AsciiDoc 文書の変換がリアルタイムに確認できるプレビューが表示されます。

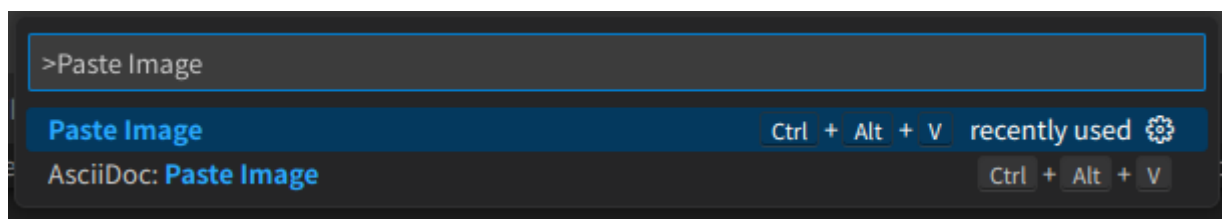


2.3.2. クリップボードからの画像挿入

本手順で VS Code の推奨拡張として導入される Paste Image（mushan.vscode-paste-image）は、クリップボード上にある画像をファイルとして指定の位置に格納した上で、AsciiDoc 文書にリンクを挿入する便利な拡張です。

特にコンピュータの操作手順文書をつくる場合に活用すると強力です。次のような簡単な操作でクリップボードの画像を AsciiDoc 文書に挿入できます。

1. スクリーンキャプチャなどの機能でクリップボードに画像を保持する。
2. VS Code で AsciiDoc 文書を開き、**VS Code > F1 キー押下 > Paste Image** と入力 > **エンターキー** で選択する。



AsciiDoc 文書には次のように画像リンクが挿入されます。また、開いている AsciiDoc 文書から相対で images/ として見えるパスに画像ファイルが格納されます。

```
image::2023-06-30-12-11-56.png[]
```

挿入時のファイル名の命名規約や出力先のフォルダ設定は `.vscode/setting.json` で行うことができます。

`vscode/setting.json`

```
{
  "pasteImage.path": "${currentFileDir}/images",
  "pasteImage.basePath": "${currentFileDir}/images",
  "pasteImage.defaultName": "Y-MM-DD-HH-mm-ss",
}
```



AsciiDoc 拡張にも同様の機能 (**AsciiDoc: Paste Image**) がありますが、現在のところ Paste Image 拡張のほうがファイル名などの設定が柔軟です。VS Code のキーコンフィグをするなどして必要に応じて使い分けると良いでしょう。

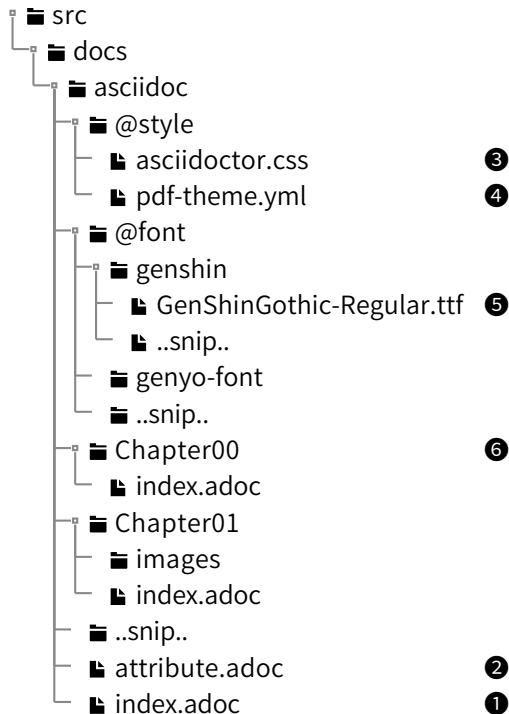
クリップボード連携のシステムインターフェース

Paste Image 拡張のクリップボード連携のシステムインターフェースは次のシェルスクリプトで実装されています。動作しない場合などに参考になさってください。

```
$ ls -laF ~/.vscode/extensions/mushan.vscode-paste-image-1.0.4/res
..snip..
-rw-r--r-- 1 hiromasa hiromasa 492 6月 26 2021 linux.sh
-rw-r--r-- 1 hiromasa hiromasa 1540 6月 26 2021 mac.applescript
-rw-r--r-- 1 hiromasa hiromasa 680 6月 26 2021 pc.ps1
..snip..
```

2.4. 文書のファイル構成

以下に文書のフォルダとファイル構成を示します。VS Code でプレビュー確認を行いながら、サンプル文書から執筆したい文書に合わせカスタマイズしていくとよいでしょう。



```

src/docs/asciidoc/index.adoc ①
src/docs/asciidoc/attribute.adoc ②
src/docs/asciidoc/@style/asciidoctor.css ③
src/docs/asciidoc/@style/pdf-theme.yml ④
src/docs/asciidoc/@font/**/*.ttf ⑤
src/docs/asciidoc/Chapter{number}/index.adoc ⑥

```

- ① 文書を作成する起点となる AsciiDoc 文書です。大きな文書の場合はここから他の AsciiDoc 文書を include して構成していきます。
- ② 文書設定をするためのファイルです。各文書から include します。
- ③ HTML 出力とプレビュー用のスタイルシートです。文書に合わせて修正することができます。
- ④ PDF 文書に変換する際に使われるスタイル定義です。文書に合わせて修正することができます。
[Asciidoctor PDF Theming Guide](#) からドキュメントが参照できます。
- ⑤ PDF 文書に埋め込みされるフォントファイルを配置します。pdf-theme.yml からファイル名で参照されています。TrueType フォント .ttf が指定できます。
- ⑥ src/docs/asciidoc/index.adoc から参照される子文書です。後述の build.gradle による画像パス解決のためフォルダ名は Chapter{number} とします。

src/docs/asciidoc/attribute.adoc では文書のデフォルトキャプション名などの属性定義が行えます。必要に応じて修正してください。

src/docs/asciidoc/attribute.adoc

```
..snip..
:preface-title: まえがき
:toc-title: 目次
:appendix-caption: 付録
:caution-caption: 注意
:example-caption: 例
:figure-caption: 図
..snip..
```

AsciiDoctor で利用可能な属性は次から参照できます。

<https://asciidoctor.org/docs/user-manual/#attributes>

Attributes are one of the features that sets AsciiDoctor apart from other lightweight markup languages. Attributes can activate features (behaviors, styles, integrations, etc) or hold replacement (i.e., variable) content.

— asciidoctor.org

2.5. 執筆のイテレーション

環境が整った後の文書執筆の進め方のイメージは次のようになります。

1. プロジェクトフォルダを VS Code で開く。
2. src/docs/asciidocs 配下の AsciiDoc 文書を VS Code でプレビューしながら執筆する。
 - Chapter が増えた場合は src/docs/asciidocs/index.adoc に Chapter を追記し、src/docs/asciidocs/Chapter*/index.adoc ファイルを新規追加する。
 - 画像ファイルが必要な場合は、src/docs/asciidocs/Chapter*/images フォルダに追加する。
3. 文書執筆の一定の区切りをもって ./gradlew docs で文書のビルドを行い、HTML/PDF 文書を docs/index.html と docs/index.pdf で推敲する。
 - ./gradlew docs の入力には VS Code の統合ターミナルが使えます。
4. 必要ならばプロジェクトディレクトリを Git などのバージョン管理下として、コミットを行う。
5. 本日の執筆を終え、明日はまた 1. に戻る。

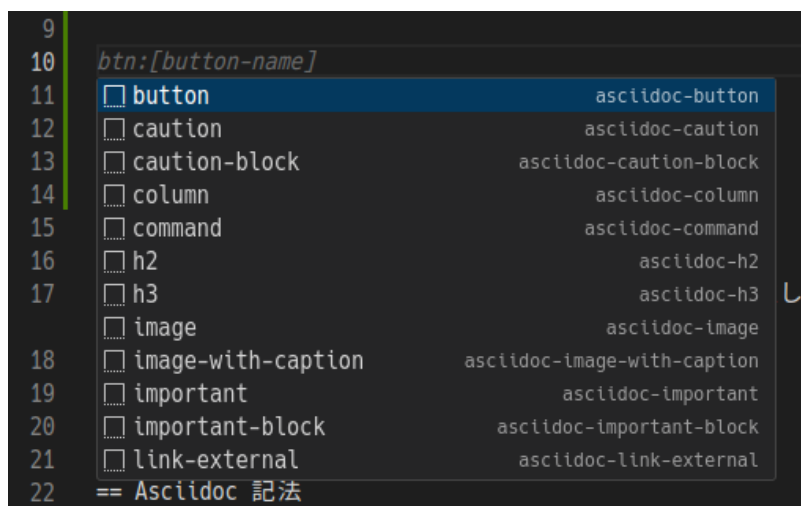


推敲は、生成された PDF 文書を iPad などペンシルデバイスを持つ機械に転送し「赤入れ」すると便利かもしれません。

3. AsciiDoc 記法

AsciiDoc 文書で利用可能な記法の中で、特に技術文書で使いそうなものを取り上げて解説します。

なお、プロジェクトフォルダの `.vscode/asciidoc.code-snippets` 設定には VS Code の **[Ctrl + Space]** 操作で補完可能な形式で AsciiDoc 記法のスニペットが格納されています。プロジェクトで定形の記法があれば追加・修正すると便利でしょう。



3.1. 文書中の相互参照

文書内の参照リンクは `.adoc` 文書中で次のように指定します。HTML/PDF でクリックリンクが生成されます。

```
[[project-structure]] ❶
== AsciiDoc 記法

[[introduction]] ❷
== はじめに

<<project-structure,章の冒頭>> ❶
<<Chapter01/index.adoc#introduction,はじめに>> ❷
```

- ❶ 同一 `.adoc` 内での内部参照
- ❷ `.adoc` をまたいだドキュメント間参照

リンクの例

- [章の冒頭](#) を参照してください…
- [はじめに](#) で述べたように…

3.2. ソースコードシンタックスハイライト

[source] ブロックを用いて文書中にソースコードをシンタックスハイライト付きで埋め込みます。また、`// <1>` 形式でソースコード下部に対応する説明が書けます。

```
[source, javascript]
[caption=""]
.JavaScript ソースコードのシンタックスハイライトの例
----
function hello() {
    console.log("Hello, World!"); // <1>
}
----

<1> コンソールに ``Hello, World`` を出力
```

JavaScript ソースコードのシンタックスハイライトの例

```
function hello() {
    console.log("Hello, World!"); ❶
}
```

❶ コンソールに Hello, World を出力

3.3. ファイルインクルード

.adoc ファイルから別のファイルをインクルードできます。ソースコードや後述のダイアグラム形式などを別ファイルとして切り出すのに便利です。



Gradle のファイル更新監視は .adoc からインクルードされたファイルまでは及びません。インクルード先のファイルだけを書き換えた場合は `./gradlew docs` が処理なしで終了してしまいますので、この場合は `./gradlew clean` するなどしてからリビルドしてください。

```
[source, rust]
----
include::source/hello.rs[]
----
```

インクルードにより挿入されたソースコードの例

```
fn main() {
    println!("Hello, world!");
}
```

3.4. 表形式

表形式は次のようなコードで定義することができます。

```
[format="csv",cols="1,2"]
[frame="topbot",grid="none"]
[caption=""]
.表形式の例
|=====
| カラム1, カラム2
| キー1, バリユー1
| キー2, バリユー2
|=====
```

表形式の例

カラム1	カラム2
キー1	バリユー1
キー2	バリユー2

3.5. 脚注

補足点を脚注するいくつかの表現があります。

NOTE: メモ

TIP: チップス

IMPORTANT: 重要

WARNING: 警告

CAUTION: 注意



メモ



チップス



重要



警告



注意

3.6. コラム表現

.コラム

ブロックを使ってコラム表現を挿入します。

吾輩はコラムである。名前はまだ無い。

コラム

ブロックを使ってコラム表現を挿入します。

吾輩はコラムである。名前はまだ無い。

3.7. ダイアグラム記法

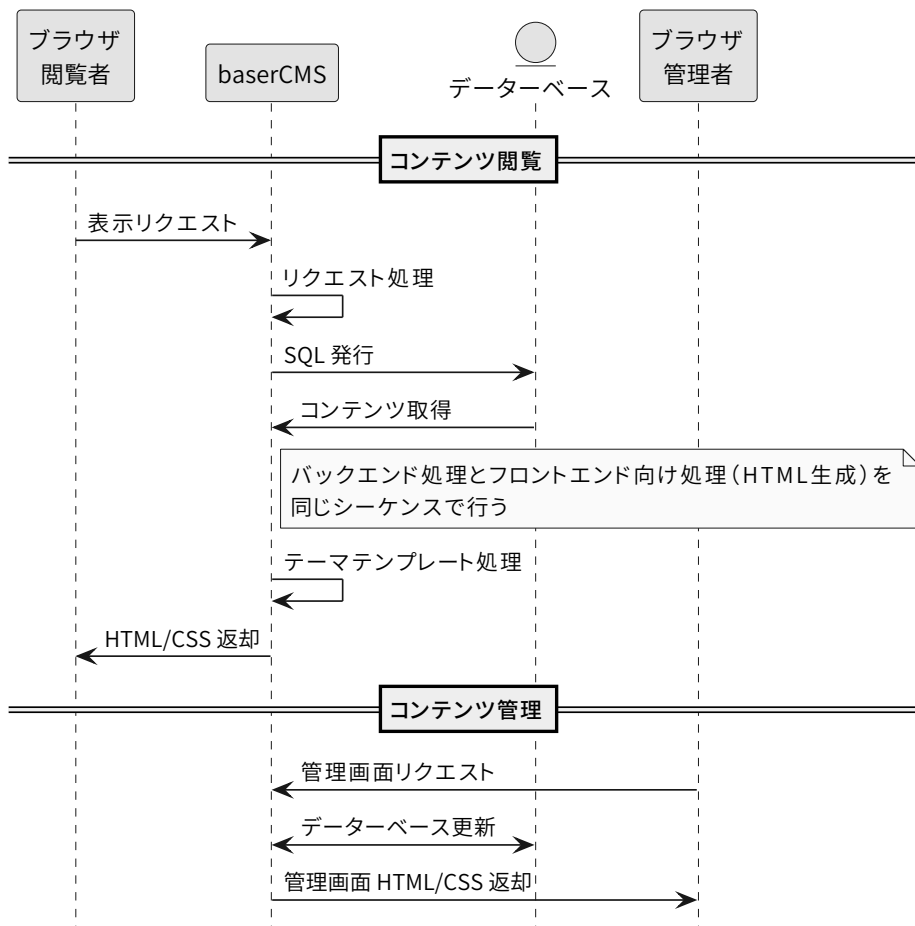
本変換ビルドスクリプトでは `asciidoctorj-diagram` が有効になっており、いくつかのダイアグラム記法を追加のアドイン無しで使うことができます。

3.7.1. PlantUML

記事中に PlantUML 形式のダイアグラムを記述し、生成された `.svg` ベクター画像を文書に展開するには次のようにします。

シーケンス図の例

```
[plantuml, diag-sequence-sample2, svg, pdfwidth=70%, width=70%]
[caption=""]
----
@startuml diag-sequence-sample2
skinparam monochrome true
hide footbox
participant "ブラウザ\n閲覧者" as browser
participant "baserCMS" as basercms
entity データベース as Entity
participant "ブラウザ\n管理者" as admin
== コンテンツ閲覧==
browser -> basercms: 表示リクエスト
basercms -> basercms: リクエスト処理
basercms -> Entity: SQL 発行
Entity -> basercms: コンテンツ取得
note right of basercms: バックエンド処理とフロントエンド向け処理（HTML生成）を\n同じシーケンスで行う
basercms -> basercms: テーマテンプレート処理
basercms -> browser: HTML/CSS 返却
== コンテンツ管理==
admin -> basercms: 管理画面リクエスト
basercms <-> Entity: データベース更新
basercms -> admin: 管理画面 HTML/CSS 返却
@enduml
----
```



PlantUML ダイアグラムのリアルタイムプレビュー編集

本手順の VS Code の推奨プラグインとなっている PlantUML 拡張 (jebbs.plantuml) を使うと、PlantUML のダイアグラム記法も VS Code 上でリアルタイムプレビューすることができます。

プレビュー処理をするために必要な PlantUML サーバは Docker コンテナで起動すると便利でしょう。なお、Gradle による文書の変換では内蔵の PlantUML ライブラリが使われますので本サーバーが起動している必要はありません。

```
docker run -d --rm -p 8080:8080 plantuml/plantuml-server:jetty
```

.vscode/setting.json は次のようにポート 8080 で PlantUML サーバが起動されることを期待して構成してあります。

.vscode/setting.json

```
{ "plantuml.server": "http://localhost:8080" }
```

文書で使う PlantUML ダイアグラムを .puml 拡張子で保存することで AsciiDoc と同様にプレビューアイコンが表示され、プレビュー画面ではリアルタイムに .puml ファイルの修正が反映されます。

Salt の例(1)

```
[plantuml, diag-salt-sample1, svg, pdfwidth=30%, width=280px]
[caption=""]
----
' https://github.com/iconic/open-iconic/
@startsalt diag-salt-sample1
{
{T
+ <&folder> wp-admin
+ <&folder> wp-content
++ <&folder> themes
+++ <&folder> my-theme | 新規作成
++++ <&file> style.css | 新規作成
++++ <&file> index.php | 新規作成
++ <&folder> uploads
+ <&folder> wp-includes
+ <&file> .htaccess | 自動作成
+ <&file> index.php
}
}
@endsalt
----
```



Salt の例(2)

```
[plantuml, diag-salt-sample2, svg, pdfwidth=30%, width=30%]
[caption=""]
----
@startsalt diag-salt-sample2
{
  □ ゲイン<&person> | "MyName  "
  パスワード<&key> | "****  "
  [キャンセル <&circle-x>] | [OK <&account-login>]
}
@endsal
----
```

ログイン 

パスワード 

AsciiMath の例

```
[plantuml, math-sample1, svg, pdfwidth=70%, width=70%]
[caption=""]
----
@startmath math-sample1
f(t)=(a_0)/2 + \sum_{n=1}^{\infty} a_n \cos\left(\frac{n\pi t}{L}\right) + \sum_{n=1}^{\infty} b_n \sin\left(\frac{n\pi t}{L}\right)
@endmath
----
```

$$f(t) = \frac{a_0}{2} + \sum_{n=1}^{\infty} a_n \cos\left(\frac{n\pi t}{L}\right) + \sum_{n=1}^{\infty} b_n \sin\left(\frac{n\pi t}{L}\right)$$